

## 学士課程 4 年生における感染予防に関する看護技術経験到達度と OSCE の自己評価の関連

山縣恵美、橋本顕子、高尾憲司、佐伯良子、山本容子、杉原百合子、滝下幸栄、笹川寿美、光木幸子、岡山寧子、眞鍋えみ子

京都府立医科大学医学部看護学科

### 【目的】

A 大学では看護実践能力の育成を目指した授業の総括的評価として 4 年生を対象に平成 21 年度から OSCE を実施している。そのなかで感染予防に関する評価得点が低い傾向が明らかになった。そこで、感染予防領域に関する全臨地実習終了時の看護技術経験到達度(以下、技術到達度)と OSCE における学生の自己評価得点(以下、OSCE 自己評点)との関連を検討した。

### 【方法】

- 1.対象者：学士課程 4 年生で授業選択者 30 名のうち有効回答が得られた 25 名。
- 2.調査時期：技術到達度調査は平成 23 年 7 月、OSCE は同年 11 月に実施した。
- 3.調査項目：技術到達度は、厚生労働省による「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」142 項目のうち、感染に関する 4 項目(標準予防策、必要な防護用具の装着、使用器具の感染防止の取扱、無菌操作)を抽出し、到達度を単独で実施可能～知識なし・未経験の 9 段階で調査した。OSCE は 11 領域 50 項目(コミュニケーション、感染予防、説明と同意、医療安全等)を 2～3 段階評価(0～2 点)で評価している。その中の感染予防は 9 項目(18 点満点)であり、OSCE 終了時に学生に自己評価させた。
- 4.分析方法：技術到達度は、単独実施可能とそれ以外(助言が必要～知識なし、未経験)の 2 群に分けた。また、OSCE 自己評点を中央値 10 点で高低 2 群に区分し、その関連をカイ二乗検定により検証した。
- 5.倫理的配慮：口頭で研究概要及び成績には関係しないこと及び同意をしなくても不利益を被らない等を学生に説明し同意を得た。

【結果】看護技術到達度は、単独実施可能者割合は標準予防策と必要な防護用具の装着は共に 88.0%、使用器具の感染防止の取扱 72.0%、無菌操作 52.0%であった。OSCE 自己評点は平均 9.8 (SD=2.8) 点であった。看護技術到達度 4 項目と OSCE 自己評点の関連では、有意な関連は認められなかった。

【考察】今回、感染予防に着目して、臨地実習での看護技術到達度と OSCE の自己評価の関連を検討したが、関連は認められなかった。すなわち、臨地実習での経験到達度は比較的高かったものの OSCE といった状況設定の中での適時・適切な方法を用いた感染予防行動には至らないことが示された。それは、技術到達度は実習全般における総合的な技術の実施状況と習熟度を問う一方で、OSCE では具体的な状況での技術を評価しているためと考えられた。特に手指消毒では、学生が手技の習得を認識していても、適切なタイミングでの実施には至っていないことも実習で見受けられることから、学習進行状況にあわせて OSCE を取り入れることにより看護実践能力の習得度をより具体的に評価できると思われる。(本報告は文部科学省平成 21 年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。)